

風の末裔シリーズ・3rdシーズンの2
～ネメアの獅子・前篇～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

AC 一二五三

春霞の草原に土埃を立てて軍隊が行進する。大ハーン・モンテの命を受け、今まさに王都を出陣し、西方へと旅発つ、地平まで続く大隊。

先頭近くに、王の実弟である大将フレグの騎馬。周囲はその祖父テムジンの代からの歴戦の猛者で堅められている。

猛々しい顔の中に一人、輪郭に幼さの残る、年若な青年がいる。隣の父親は、曾祖父の代からモンゴル王家に仕える猛将の血族。紅顔の青年は真新しい甲冑に身を包み、血の誇りを胸に、初陣に心躍らせていた。

旧王都が見えた時、そこから駆けて来る一頭の騎馬があった。遠目にも判る、この国には珍しい連銭葦毛。そして、あの日立つ淡栗毛の髪…大ハーンの例の第四皇子。

「父上…」
「ああ、今回の遠征は長くなる。行って良い。あまり遅れぬよう」

「は…、有り難うございます！」
青年は一礼して隊列を離れ、葦毛の方へ馬を走らせた。

「バヤン!!」

淡栗毛の少年は、息せききって青年の騎馬に駆け寄った。

「行っちゃうんだ。気を付けてね。怪我しないでね」

「シリギ様…」

青年は呆れながらも、情のこもった目で少年を見る。

「戦場へ行くのです。怪我を恐れては武功は立てられません」

「うん、だけど」

少年は冬空のような薄青い瞳で、真っ直ぐ見つめて来る。

バヤンは本当にこの目に弱い。大ハーンにだって、自分の仕える王君にだって、こんな気持ちは湧かない。

「バヤンは無事でいて欲しい。元気で戻って来て欲しい」

「……………」

本当にこの皇子は…。

他の王族は…この少年の兄達だって、自分に『血に恥じぬよう』『期待している』『武功をあげよ』と、仰々しく見送ったのだ。こんなだからこの子は一族をはじめかれて、変わり者と呼ばれ、つましく旧王都で祖母と暮らす羽目になっているのだ。

しかし将来有望なこの青年は、その変わり者の皇子が気に掛かってしょうがない。こんなにストレートに『無事で帰れ』しか言われない見送りのなんて…。



「私は無事で戻りますよ。この愛する生まれ育った草原の地に必ず戻って来ます。そして貴方にまた剣を教えたい」

青年はだから、この少年に対してはうわべでなく、素直な言葉が出て来る。そんな自分を不思議に思う。親兄弟にも学友にも、他の誰にも言わない言葉が出て来る。

「うん、僕、バヤンに教えられた通り、一日だって怠けない。次逢う時は、シリギに剣を教えた甲斐があった！ って思われぬように」

「頼もしゅうございます。そうして貴方もモンゴル王朝の繁栄の為、活躍される御身となるのでしょう。そうしたら私も教え甲斐があったと思えましよう」

「違ふよー！」
少年はいつものように不満顔になった。

「僕は僕の大切な者を護れるように、強くなりたいんだ!!」
「……………」

そう言って、鬪将と名高い父親の所へこの少年が訪ねて来たのは、去年の初夏だった。

皇子の希望とはいえ、多忙な將軍に剣の稽古を付ける時間などとはなく、体ていよく息子のバヤンが当てがわれたのだ。

最初不満気だった皇子も、五つ年上のこの息子が、父も一目置く剛の剣の持ち主だとすぐ分かり、真面目に旧王都から稽古

に通って来た。

筋はなかなか良かったし、一族の中で変わり者扱いのこの子と居る時、何故かバヤンはほっとして、いつしか稽古の時間を待ち遠しく思えるようになった。この真っ直ぐな子供と話していると、身分も立場も脱いだ素の自分になれたのだ。

青年は、彼を好き…だった。
きっと、かなり、好き…だったのだ……。

若武者は手を振って駆け去り、シリギはその影が騎馬群に紛れて小さくなくても、最後まで出来る限り目に焼き付けていた。

西方の平定は容易ではない。何年、何十年…、もしかしたら今生の別れかもしれない。少年にだって、あの青年は、人間の中で数少ない、大好きなヒト…だったのだ。

その影が地平に消え、シリギは乾いた瞳を反らして、西の森へ馬を向けた。

西の森…鎮守の森。近隣の住民はそう呼んで近寄らない。テムジンの出した触れがまだ生きている。

森の入り口から奥に向けて踏み後があり、騎馬一頭通る道が出来ていた。連銭茸毛は慣れた感じで通い慣れた道を歩き、一本の蜜柑の木の立つ中央の広場へと抜ける

白い花はまだ蕾だが、清しい香りに満ちている。森の中心の朽ちたバオはきれいに片付けられ、結構な広場になっていた。周囲に、大人の腕ほどの太い薪が散らばっている。

シリギは広場の真ん中に立ち、まず、目を閉じて感覚を張り巡らせた。

.....

大丈夫、近くに蒼の妖精はいない。上空から見られる事はないだろう。

足元に転がっている長い木刀に手をかざす。それはフワリと掌に吸い寄せられた。そのまま木刀を構えて、もう一度目を閉じた。

「風よ……!!」

葦毛は蜜柑の木の下に隠れた。そこ以外の広場一杯に、いきなり強力な風が満ち溢れた。散らばっていた薪が巻き上げられ、凄まじい勢いで飛び交う。

背後から横から飛んで来る薪を、少年は木刀で打ち落とす。打ち落とされた薪はまだ舞い上がって、今度は別方向から飛んで来る。その『修練』は、彼が気配を感じるまで続いた。

「やめ……!!」

風がパタリと止んで薪がドサドサと地面に散らばる。程なく、上空に空飛ぶ緑の馬が横切った。知った顔ではない……。



遅い闘将。

自室に戻り、兜を脱いで甲冑を外す。ほお…と、息を付いて窓の外を見やった。

思い描いた通りの順調な大将軍への道。満足な筈だ。でも時折訪れるこの渴いた感じは何だろう？

バヤンは故郷の少年の事を忘れてはいなかった。いや、何でか、武人としての名声を得て大勢に賞賛される程に、一人になると急激に、彼の事が思い出されるのだ。

「しみつたれた面してんなよお！」

不意に天井の隅の暗がりで見えた。朱色の火花が飛んで、ポツ…と狼の形の炎が浮かんだ。

「またお前か…、妖(あやかし)…！」

炎ははつきり狼の姿になって、空中を歩いてバヤンに近寄った。

「俺様の言った通りだったろう？ これからも俺様がお前さんの手伝いをしてやる。楽しいだろ、連戦連勝」

「……………」

「ご機嫌斜めか？」

「お前、何が目的だ？ 妖(あやかし)？」

「んんんんん？」

「バシる訳には行かない…」

一年前、蒼の大長は、自分の風の力を封印した。それは自分の身を氣遣つての事だ。人間が術を使うのは、その者の命を磨り減らす。蒼の妖精はみな同じ考えだ。一人を除いて。

その一人のカワセミの力はまだ借りていない。貰った石は肌身離さず首から下げているが、使った事はない。

そう…、封印の効いたこの状態で、シリギはここまで風が使えるようになつていたので。

「僕は強くなる!! トルイのように!! 護りたいモノを護れるように…!!」

AC 一二五九

凱(き)の聲が上がり、若き将が大歓声の中、凱旋する。逞しい体軀、精悍な顔立ち、力強い焦茶の瞳。

「バヤン様!!」

「バヤン様!!」

見た者すべて魅了する、光輝くオーラを放つその将は、手を挙げて喚声に応え、城に入った。

君主フレグに着いて故郷を出て数年。西方の制圧は着々と進み、父と共に活躍したバヤンは、若くして將軍を拜命し、君主の片翼を任されるまでになっていた。順風満帆、誰もが憧れる

赤い狼は、鼻面がくっつく程バヤンに顔を寄せた。

「も・く・て・き……」

「どんなに盛り立てても私は王族ではない、ハーンには成り得ぬ、お前に旨みは無いぞ。それとも魂でも欲しいのか？」

真剣に問いかける若者に、狼は目を丸くして、それからせせら笑った。

「人間の価値観に当てはめるなや。実体すらあやふやな俺様が、身分や物を欲しがるか？ 俺様はな…、ただ、面白いのが好きなのや」

「面白……」

「そうだ!! お前さんは面白い……!!」

「……………」

言葉を失くして立ち尽くす若者を残して、赤い狼はまた暗闇に溶けた。

この数年、いつからか、自分にだけ見える、炎をまとった妖しい獣。戦場で荒んだ神経が見せる妄想なんだろうか？

戦が…お・も・し・ろ・い……

暫く茫然として、バヤンは再び窓の外を見た。いまだ自分の名を呼び、讃える兵士達……

妖の導くまま戦場を駆けると、気が付けば常に戦局の中心に身を置く自分がいた。戦の渦心を確実に嗅ぎ分ける将を、いつ

しか人は『百眼を持つ戦神』と呼ばれ、崇めている。

自分も、もう立ち止まらない所に居る。

「シリギ様……」

何でか、またあの少年を思い出した。毛羽立ってしまった心の中でも、あの子供の居場所だけは穏やかに澄んでいた。

彼はどんな大人になったのだろう……？

AC 一二六〇

ソルカ妃が鬼籍に入っても、シリギは旧王都の蜜柑の花咲く庭園に住み続けていた。

その間、ハーンである父が遠征先で亡くなった。

後継は王都の留守を預かっていた父の末弟、シリギには叔父にあたるアリクブケが収まった。ただ、この末弟、どうみてもかなり頼りない。病弱で引き籠りがちだし、ハーンとしては余りにも器に欠ける……というのは口さがない諸々の意見だった。

そんな連中は、シリギのひと睨みで黙った。そう、この数年で、彼の立ち位置は大きく変わっていた。

処々の小戦でこの十代の青年は、トンでもない力を発揮した。単身敵本陣に突っ込んで、大将の首根っこを押さえるなんて、お加断の英雄譚みたいな事を、ホントにやっていたのけたりした。眠っていた獅子が頭をもたげたように、…いきなり!

前王も手の平を返したように側室腹の彼を取り立て、彼にはかなりの軍隊と所領を遺していた。今や彼は、祖父トルイの一族の、頂に近い所にいたのだ。

「驚きだな…。あのヘタレ小僧が」

バルコニーの手摺に立つヒトがいる。

「封印も解いていないっていうのに…」

有翼のそのヒトは鷹のように悠々と、活気を取り戻しつつある城下を眺めていた。廃虚だった城は復興され、淡栗毛の若き将の拠点となっていた。

中庭は大切に護られ、蜜柑の黄緑の葉が勢いよく繁っている。

「急ぐ必要があったからね。早く権力が欲しかった。戦で武功を挙げるのが手っ取り早いだろ」

銀製の盃を二つ持って、部屋の中から薄青の瞳の青年が出て来た。

「ああ、酒は飲まないんだっけ？」

「キミの酒なら、飲んでやる」

背中に掛かる淡栗毛の髪は、以前はこの子供の弱さの象徴のように見えたが、今は陽光にきらめき、凜とした強さを現している。

青年の差し出す盃を受け取って、水色の髪の妖精は、バルコ

ニーの縁に立ったまま南方の地平を見据えた。青年も盃を持ったまま手摺に寄り掛かって、そちらを見やる。

「来るな……」

「来るね……」

「あの坊っちゃん王に抗うえるかな？」

「…その為に、僕は、地盤を築き、此処に居る」

「妖精は人間に手出し出来ない。ボクも…」

「いいよ、カワセミ。こうして来てくれるだけで」

弱い大ハーン存在を、人間の世が許しておく訳がない。その座を狙って来るのは、彼の兄、前王の次弟、南方に勢力を集める、フビライ…！

「空まで歪んで見える…」

カワセミは彼方を見やって眉間にシワを寄せた。

「人間の身を借りて現れるとは…」

AC 一二六四

見上げるような天井には豪華な彫刻が施されている。モンゴル王朝の大ハーンに相應しい謁見室。全てが新しくきらびやかだ。即位して一年足らずの急務とは思えない。新ハーンの方が伺い知れる。最もそれを知らしめる為かもしれない。

ハヤンは、自身の君主フレグ（その新ハーンの弟にあたるの

だが()の使者として、先程から謁見の間に控えている。

祖国の地を踏むのは十数年振りだ。

西方の制定に出陣したフレグは、自分の兄と弟が祖国で後継争いを始めるや、どちらにも手出しせず、その地に独自の王朝を開き、根を下ろした。昔から賢く要領の良いヒトだった。

バヤンの父や親族はその賢明な王を讃えた。フレグの王朝は彼等に護られ、そこそ繁栄して行くだらう。

しかしバヤンはそこに落ち着けなかった。いつも飢えて渴いていた。

今回の祖国への定期連絡の使者に名乗り出たのも、『何か』を求めて…と、胸が騒いだからかもしれない。

小さなざわめきが起き、空気が変わった。高い天井まで空気がシン…と張り詰める。目を上げると、今現在のモンゴルの大ハーン、フビライが、玉座にも座らずそこに立って居た。

「そなたがバヤン…か？ 火の国の百眼の闘将」

バヤンは息を呑んで、すぐに返事が出来なかった。

全身から立ち昇る王者の気。射竦めるような眼。身体の部品一つ一つが特別拵えのように美しく均整が取れている。

存在その物が王!! という人物はいる。祖父にそう聞いた事がある。自分は今その人物に対峙しているのだ。バヤンの闘将の血がそれを教えていた。彼はたちまちこの王の虜となった。

城の客間も新しく、贅が尽くされていた。

バヤンは夜空を眺めながら物思いに更ける。西国の光の強い星より、この国の霞んだ天の川を見るとホッとす。自分の心はやはりこの国にあったのだ。

「…!!」

瞬間、バヤンは腰の物を抜き、後方へ飛びすさった。

上方からバルコニーに飛び降りて来た者がいたのだ。

「何奴？」

大ハーンの居城に曲者?! ちょっと信じられない。

「しまってくれ。驚かせて悪かった!!」

両手を上げて月明かりに照らされるのは…、波打つ細い淡栗毛の若者。

「…?…?…? シリ…ギ…様？」

どんな大人になったらう? 常々思っていた子供は、バヤンの望み通り、そのまま大きくなっていた。

清しい表情も、薄青の瞳も、大人特有の濁りに毒されず、相変わらず真っ直ぐバヤンに向けられていた。変わった所といえば、細身ながら無駄のない、逞しくしなやかな体躯だった。剣の教え甲斐のあった身となったのだろう。

「無礼、許してくれ。一刻も早くバヤンの顔が見たかった!」

せたら、バヤンに良くない」

「……………」

バヤンはこの賢い若者が何故勝ち目のない戦いに挑んだか、疑問に思っていたが聞かなかった。終わって結果の決まった事だ。

「これから王の為に働き、信頼を得て行きましよう。私と共に」

「……………」

シリギは手を離して、数歩後退した。

「やっぱり、誘われたんだ？ 王に。西方へ帰らず自分の元に留まるようにつて？」

「……………」

眉間にシワを寄せ、その眼から懐っこさは消えた。

「……………」シリギ様……？ 将なら、偉大な王の元で働きたいと思うのは当たり前です。僭越せんえつながら私は、人の器を見る眼は持っているつもりです」

「……………」

「……………」

シリギは更に下がって、バルコニーの手摺に背中を付け、両手を広げて縁に掛けた。影になって表情が見えないが、その眼は人間の物かと疑う程、鈍く光っていた。

「バヤンの眼は正しい。フビライは王たる器は充分過ぎる程だ。それは『みんな』認めている。……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「あ、ああ……」

バヤンはゆっくり剣を静めて剣を収めた。その手を差し出す前に、

若者は駆け寄って両手で握った。見上げて歯を見せた顔は、子供の頃のままで。

「久しぶり!! バヤン……!!」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

いのですか?」

「バヤンは焦れて少し声を上げたが、若者は横を向いて視線を落としてしまった。」

「いや、遅かった。バヤン、もう決めちゃったんでしょ。王に心を奪われている。もう、流れの中の一員だ」

「なん…なんの…?」

「バヤンが問い掛けの言葉を探す前に、シリギは両手を手摺に付いて、ふわりとその上に立った。」

「?!」

「今、一瞬、体重が無いような動きだった?」

「バヤンは自分の信ずる道を進め。いつか僕と…戦場で対峙する時が来ても」

「そのままシリギはふいっと後ろに跳んだ。」

「バ…、バカッ…!!」

「ここは最上階だ。バヤンはバルコニーに飛び出した。手摺から身を乗り出して下を見るが、噴水のある庭園が篝火に浮かぶばかりで、誰も見えない。」

「……自分は、ナニを、見たんだ…?」

「バヤンは暫くバルコニーに立ち尽くしていた。」

「今のは確かにシリギだった? 何で自分に何も言ってくれな

かったのだろうか? それに、戦場で対峙するだつて?!」

「そんな…バカな?!」

「バカでもないぜ」

「豪奢な模様のある天井の隅の薄暗がり、銀の眼が光る。赤い狼が薄くそこに現れたが、今日は少したたらを踏んでいた。」

「くわはらくわはら…だぜ」

「妖(あやか)しか。何だ、どうした?」

「危うく見つかる所だった」

「…は?」

「見つかったらヤバイぜ、あいつ…」

「あいつ…って、フビライ王か?」

「フビライ? いや、あれはテムシンと同じだ。俺様の驚異にはならない。怖いのは、あの青い眼のガキだ」

「シリギ様?」

「嫌な能力を継承してやがる」

「?…能力…?」

「お前さん、感じないか?」

「子供の頃から知っているが…どうとも…」

「まだまだだな」

「………」

風に乗ってバルコニーから裏門まで飛び降りたシリギは、隠れていた葦毛を呼び寄せ跨がった。

「バヤン…、凄いい立派になっていたな。男の僕でも、惚れ惚れしちゃった」

独り言を愛馬に話し掛ける。祖母の尾花栗毛を母馬とした、連銭葦毛の一粒種。こいつは連銭すら無い真っ白だ。

「フビライの配下に治まるか…」

彼には来て欲しくなかった。ざわつく胸を抑えて、葦毛を返して旧王都の自城へ向かう。

ACC 一二七六

戦の陣はいつもシンとした緊張に満ちている。

人生の殆どを戦場の野営に身を置いているバヤンには、この方が落ち着く。

大ハーン、フビライの配下に収まり、その命で大陸の南方に出陣して、幾年経ったか。バヤンも、もう壮年と言ってもいい風貌になった。

フビライが玉座争いに勢力を裂いて、その間に失ってしまった領土を取り戻すのは、百眼の闘将の実力を持ってすれば、その時間は掛からなかった。そのまま更に侵攻を続け、遂に大陸

で一番の大国を降し、王の期待に応える事が出来た。

総て順調だ。

モンゴル帝国はやがてこの大陸全て…、海を越えて東の黄金の国をも征して行くだろう。この勢いは止まらない。大きな力が働いている。

大ハーンフビライの持つ王者の力。自分はその波頭に乗っているだけだ。そして隣には、赤い狼が笑いながら駆けている。今やバヤンは狼と同化し、自身が炎のオーラをまとった戦神と成っていた。

「早馬です!!」

大将陣に、息急いさせきぎった伝令が駆け込んだ。

「ほ…本国の…大ハーンよりの、緊急の詔にございます!!」

使者は馬から飛び降り、バヤンの前に転がりながら書状を差し出した。直後、馬は泡を吹いて昏倒する。ただならぬ様子に、急ぎ書状を開いたバヤンは、その場で凍り付いた。

「…何を…や…っ…て…いる…?…?! …シリギ様!!」

バヤンが大陸南部を侵攻している間、草原台地の東部で異変が起きていた。今の王族とは別の血族、オゴデイ一派が周辺部族を次々制圧して、フビライ王朝の驚異となっていた。

それらを退けるべく、フビライは自らの息子二人に大隊を与

え、出陣させた。そこまではバヤンにも伝わっている。

大隊の中には将としてシリギも加わっていた。フビライの皇子達はイマイチ頼りないが、『碧眼の獅子』がいれば心強い。あわ良くは、シリギにはここで大きく武功を挙げて、フビライの信頼を得て欲しい…、バヤンはそんな風に思っ、あまり心配はしていなかった。

しかし…！

いよいよ敵軍と相対した時、いきなりシリギは反旗を翻した。

……裏切ったのだ！

しかも、同じく出陣したアrikフケの息子達と結託して。そう、計画済みだった。長年フビライの元に平伏す振りをしている機を待っていたのだ。

「シリギ…さ…ま…!!」

書状を握るバヤンの指が震える。何て…事…。言いようのない寂しさが襲って来た。そう、自分の仕える王を裏切られた怒りより、自分に…何も言ってくれなかったシリギに対する、切ない寂しさ。

淡栗毛の少年は…自分が好く程に、自分の事を好いていてくれなかった。アrikフケの子供達とは結託しても。

いや、当然だろう。

彼に謀反を誘われて、自分は乗っただろうか。その可能性は

髪の本一本も無い。自分は大ハーンフビライに心底忠誠を誓っている。初対面の時から心酔しているのだ。

あの夜、バルニーで、シリギは鋭くそれを見て取ったのだ。だから…何も言わずに去ったのだ…。

「…シリギ…!!」

書状の末尾を見て、バヤンの目は更に血走った。

反乱軍は王の息子達を捕らえ、有ろう事か、敵軍に差し出したのだ。皇子と共に捕らえられた側近の将の中に、バヤンの妻の兄がいた！

「シリギ…!! 分かって…分かっていて、やったんだろうな!! 私の…怒りを買う事が!! 私が、どんな、気持ちに、なるか!! 分かっている、やったんだろうな!!!」

書状を握り潰して、百眼の鬪将は顔を上げた。その眼は怒りの炎で燃え上がっていた。

西の果て、砂漠の地で何年も、心に住み続けていた少年…。共に王を支え、この国を盛り立てて行きたい、共に歩み、共に歳とって行きたいと…思っていたのは自分だけだった。

裏切られた胸の空洞に、黒い物が沸々と沸き、それが激情を何倍にも増幅した。その中で、赤い狼が狂ったように乱舞している。

「出陣だ!! 北の、草原台地を目指す!!!」

AC 一二七四

草原を夏草が覆つた。

風の当たらない湿つた窪地に、一頭の馬が横たわっていた。馬の傍らに一人の男性。悲痛な面持ちで短剣を手にしている。

馬は目を見開いて痙攣している。四肢の一本が、関節じゃない所から曲がっていた。窪地の穴に脚を取られたのだ。

「すまなかつたな…。俺が気を付けていればな…」

馬を痛みに涙をためて主を見ている。こうなってしまうたら、愛馬の為にやれる事はひとつ。これ以上苦しまないうちに、一息で頸動脈を突いてやるだけだ。

「……………」

男性はためらっていた。早く済ませなければいけない。間もなく供の者が城から代わりの馬を曳いて来る。その前に終わらせて、自分も涙を流し終えておかねばならない。

自分は神の子だ。馬ごとくで人前でペソをかいている訳には行かない。自分で始末を付ける…と、無理矢理人払いをしたのはその為だ。この長年連れ添った愛馬の最後すら、威厳持ち見送ってやらねばならない。

意を決して短剣を握り直した時……………

「…?!」

自分の隣に、誰か居るのを感じた。そんな馬鹿な？ 誰か来る気配なんて…?

いつの間に、隣にしゃがんでいたのは、子供だった。十二、三歳位の、明るい空色の巻き髪の…女の子。男性には無頓着に、倒れた馬の額に手を当て、じっと見下ろしている。伏せた睫毛も空色だ。人間とは違う者…。

男性は然程さほどは驚かず、その子供をマシマシと見た。

「…?」

視線に気付いた女の子の方が少し驚いて、顔を向けてきた。

「見えてる?」

「ああ…」

「そうか…」

女の子はまた視線を馬に向けた。

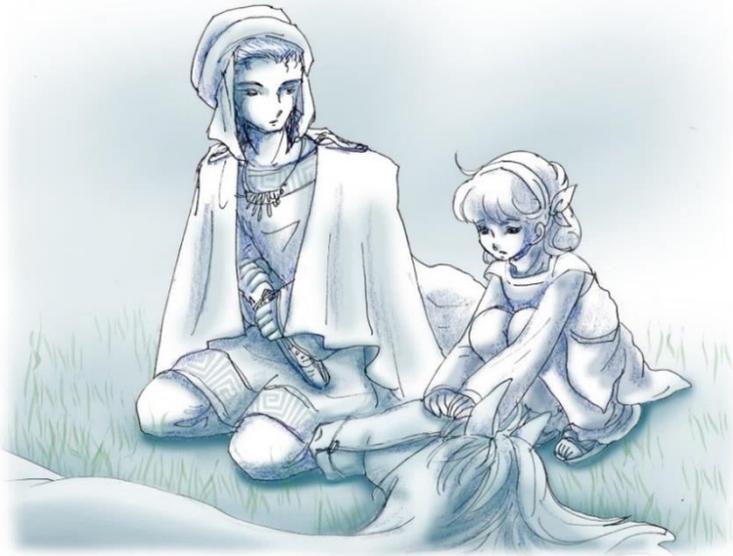
「あんたはこの子が大切なんだね。だから、この子とお話したアタシが見えたんだね」

「そうなの?」

「この子もあんたが好き…って」

「ホントか?」

男性は、神の子たるものの本懐を失ってしまった。即ち、涙が堰を切った。



女の子は男性の顔を見ないで、馬の額に手を当てたまま暫く黙っていた。

「…この子は、名馬だね」

彼女がポツリと言ったのは、少し時間を置いてからだだったの
で、男性も涙に詰まらず答えることが出来た。

「ああ、俺と幾多の戦場を駆け抜けた。幾多の武功を上げた、
名馬だ」

「ううん…、武功とか、何をやったか、じゃないの」

女の子は馬の額から頬を撫でながら言った。

「この子の為に涙を流してくれる乗り手がいる。そしてこの子
自身の心の中も、あなたの事で一杯だ。そういう馬の事を、ア
タシ達は名馬って言うんだよ」

それから顔を上げて男性を見た。

「この子はねえ…風の末裔になるんだよ」

「…風の…?」

「風の末裔だよ。アタシ達の馬」

女の子が視線で促した先には、何とも面妖な…、草で精巧に
編まれた緑の馬が佇んでいた。

「人間の間に修行した馬の魂は、何代か繰り返して、名馬に昇
華したら、蒼の里へ来るの。アタシ達は、その魂の入れ物を草
で編むんだよ」

「……………」

「この子は蒼の里へ逝くんだよ。だから、そんなに哀しまなくていいよ…」

哀しまなくていいよ…と言う言葉はどちらへ向けて言ったのか…？ 空色の睫毛の下の一粒の滴と共に溢こぼされたその言葉の最後に、馬は静かに目を閉じた。

「……今なら痛みを感じない……」

女の子は小さな声で呟うように言った。

男性は短剣を握り、正確に急所に差し込んだ。

「なあ…草の馬に宿ったこいつと、また逢えるか？」

血溜まりの馬の顔と体には男性のマントが掛けられていた。

「さあ、魂は何も覚えていないし、アタシにもどの魂がこの子か分からない。でも、たまたま逢う事はあるかもしれないよ」

最後の言葉が、この女の子のちょっとした優しさだというのは解った。

「お前は…蒼の妖精…か？」

女の子は目を見開いた。

「知っているの？」

「ああ、母に聞いていた。父の、母親の事も」

「…えと…?!」

「俺はフビライ。トルイの第二子だ」

「えっ？」

女の子はさすがにちょっと驚いた。

「じゃあ、あんた、今の、モンゴルの…王さまっ?!」

「まあ、そうだ…」

フビライは女の子の『王さま』って言い方が、他の者の『大ハン』という言い方とちょっと違って、気に入った。

「じゃあ、ソルカ妃が、あんたに喋ったの？ 妖精の事を？」

女の子は信じられない、という顔をした。

「……そうだろう…、母は口が堅かった。聞き出すのに、苦労した。」

「母から、蒼の妖精に会ったら渡してくれと、言付かっている

品物がある」

「えっ？」

「取りに来て貰えるか？」

城から代わりの馬を引いて来た供の者には、勿論、妖精も草の馬も見えなかった。話には聞いていたが、本当なんだな…と、王は胸が躍った。

空色の髪の女の子は、黙って素直に、帰城する騎馬達の後ろに着いて来た。

何と言っても、このヒトはソルカ妃の子供だ。秘密を打ち明けても不自然じゃない。妃が亡くなって大分経つけれど、渡すモノって何かしら？」

「ユコで、待っていてくれ」

草の馬は外に繋いで、城の一室に通され、王が出て行ってから女の子は、その部屋に窓が無いのに気付いた。扉も妙に分厚い。

「……」

扉に鍵をかけ、閤貴を下ろしながら、フビライは高揚した気持ちを抑えられなかった。

愛馬は最後に自分に素晴らしい贈り物をしてくれた。

蒼の妖精を手に入れたのだ!! テムジンと同じように…!!
蒼の妖精の娘を…!!!

「ユコがまた、タベからいないんだ」

執務室の御簾を開けて、水色の髪のカワセミが入ってくる。

「探して来る。今日ボクのやるべき仕事はある?」

「ああ、またか。困りモンだなあ…」

執務室の大机の向こうで、貴祿たっぶりのノスリが、山積みになった書類を手繰る。その横で処理済み書類をまとめている長い髪の青年が、顔を上げた。

「なら、カワセミ長の仕事は僕が引き受けます」

…一瞬、大長?! と見まごうが、目の縁の濃さが違う。

「ああ、すまない、ナナ」

「いえ、こちらこそすみません。ユコが手間を掛けた放しで」

「仕方がない…。誰のせいでもない」

カワセミはそう言って、双子の片割れとは思えない立派な青年に仕事を託して、執務室を出た。

シリギと出逢った頃からだ。双子のバランスが崩れ始めた。

ナナは大長に着いて、内の眼を開く訓練に入っていた。背も伸び、身も心もグングン大人へと成長して行った。

一方のユコは…どうした事か、成長が一切止まってしまった。それまではそこそこ伸びていた術の力も頭打ちに、しかも長の血筋なら持っている当然…の、内の眼の能力が、さっぱり聞く気配がない。おまけにそのせいか、身体もいつまでも子供のままだ。

妖精の成長の仕方はマチマチで、成長が極端に遅い子はたまにいる。しかしユコの場合、対称的な双子の兄がいるのが不味(まず)かった。何かというと比較される。

更にユコを傷付ける問題も、浮上して来た。いい加減一人前のナナが、いつまでも幼名で呼ばれているのが不自然なのだ。

とっくに名前を貰っていても良いのだが、双子の片割れがこの有り様だ。

ナナが、まったく悪気なく、

「一緒にこの世の光を見たいんです。命名だって一緒に受けたい。僕は構いませんよ。ユウが一人前になるまで待っています」

なんて言うもんで、ユウはますます肩身が狭くなって行くのだ。

そういう訳で、最近のユウは修行もおおざなりに、里を抜け出して幾晩も戻らない事がままあった。

その度に捜索に出て、なだめて里へ連れ帰るのはカワセミだった。それを余計な面倒な事だとは思っていない。自分が大長に散々やって貰って来た事だ。あの頃見捨てられなかったから、自分の今があると思っっている。

ただ、ユウの悩みはどうしてやりようもなく、本人だってそれが分かっているから余計にイシけて、隠れ場所も巧妙になって来ている。

「ごういう所は成長しているんだよな…、確実に」

馬を駆りながらカワセミは、先立って執務室で長三人で話し合った事を思い出していた。

「これ以上ユウの為に、里を掻き回す訳には行かない。あの子

を一度、神殿に戻そうかと思うんだ。ナナの為に、ユウの為に」

二人の実父であるツバクロが、真剣な表情で切り出した。

「そうだな…。ここでキリキリして過ごすより、お袋さんに相談に乗って貰いながら、ノンビリ暮らすのが良いのかもしれない」

里に来てからの養い親であるノスリも同調したが、カワセミだけは反対した。

「待ってくれ。今、山に帰されたら、あの子は見捨てられたとしか感じない。今まで耐えて頑張ってきた気持ちも、一気にしぼんでしまう。そんなんで山で放っておいても、きっと一生あのままだ。ここで何かを変えてやらないと、ユウは一歩も前に進めない」

「何を、どう、変えるんだ？」

困ったように問うツバクロに、カワセミも困った顔になる。何せ、ユウとナナに関しては、予知も透視もさっぱり効かないのだ。

「とにかく、結論はもうちょっとだけ待ってくれ。すべての事に意味がある。ユウが…せめて、自分の生まれて来た価値を見出させるまで」

二人の間は、カワセミの一生懸命さにほだされて、ユウの

里帰りは保留となった。元より二人だって、子供達を大切に思う気持ちに変わりはない。こんなにもユウに心砕いてくれるカワセミには感謝している。

水色の妖精は、僅かなユウの気配を辿って馬を飛ばした。

「ボクが…大人の女性として、見てやれば…いいのか？ それ
は、ム・リ・だ・・・」

カワセミは自分の心を探ってみた。薄々、大人のユウに向き合うのを嫌がっている自分が、彼女の成長を阻害しているんじゃないか…とも思っているのだ。

風と大地の流れは分かるのに、自分の心って、何でこんなに
見えないんだろう…？

「どうした？ どれも、お気に召さないのか？」

窓のない石壁の部屋には、ラシヤの天蓋付きの大きなベッドと、揃いのベルシアの調度品が入れられ、空いた空間一杯に、艶々した絹の衣装や、金系銀系の刺繍の入った靴や装飾品が、どしゃっと並べられている。

その真ん中で、ユウは石の床に座り込んでポケットしている。逃げ出す機会はそのそこあった。この現象に戸惑って、気圧がおさまっているのだ。

モノに対しての執着はそんなにない。ただ、短時間にこれだけのモノを揃えてしまうこの人物に、興味を持ち始めている。……この、子供みたいに、モノで釣る事しか考えない大人の男性に…。

妖精の娘は、笑うでも感動するでもなく、ボウツとして無言だ。フビライは困惑して焦った。

どうしたら、この娘は、ここに居たいと思ってくれるのだろうか？ どうやったら、この娘は自分を好んでくれるのだろうか？ この娘は風の妖精だ。するりと手を抜けて逃げ出す事など、きつと容易だ。一度逃がすと用心して二度と捕まえられなくなってしまう。いっそ鎖で繋いでおこうか……。

「痛い、イタイツ！！」

いつの間、フビライは妖精の細い手首を掴んでネジ上げていた。

「あ、すまない…すまない…」

口ではそう言うが、フビライは手を離さなかった。ユウが痛がって身を引いたからだ。手を離れたらそのまま逃げてしまう気がした。

ユウはと言つと、ただ手首が痛くて、本能で身をよじって逃れようとしているだけだ。しかしそうなったら、フビライはもう片手も掴んで動きを封じるしかなかった。



本当は…逃れようとする者には逆効果なのだ、王は大人のクセに、そんな事も分からなかった。

両手をネジ上げられてもユゴは、生真面目に妖精の力は使わなかった。そうすると、人間の大人の男性の力は自分をビクとも動けなくすると、初めて知った。いきなり、かっけない恐怖に襲われ、身がすくんだ。

・・タ・ス・ケ・テ・・・!!
知った気配が急激に迫って来た。

——ドガア——!!!!

外側の石壁に大穴が空いた。部屋中、土ほこりが舞い、豪華な絹は瓦礫に埋もれた。

大穴の真ん中で、水色の髪の妖精が特大の緑の槍を構え、瞳に怒りを燃え上がらせて仁王立ちしていた。

「ユゴに……ふ・れ・る・な・!!」

いつもながら迫力ある眉間の縦線。草原でユゴが降りた気配の場所の地の記憶を読んで、すっ飛んで来たのだ。

ユゴに害成す者に王も人間もない。姑息な口車で子供を騙した不埒者……!!

普通の人間ならここで腰を抜かしておしまいだ。しかし人並み外れた執念を持っているからこそ、この男性は人並み外れて

大ハーンなんて張っている。右手で剣を抜いて、左手は妖精の娘を離さなかった。

「この娘は俺が召し上げた。去れ!!」

それは無理があるだろう、火に油だ。カワセミのこめかみの青筋が、生き物のように動いた。それを見て、一番冷静になれたのはユゴだった。

「待って、待って!!」

放っておいたらトンでもない事になってしまう。手をネジられたまま、身体を回してフビライの前に立ち塞がった。

「カワセミ様、冷静になって!! 一から七まで数えてー!!」

これはユゴが癪癪を起こした時、よくカワセミに言われる台詞だ。

水色の妖精は目を丸くして、一瞬止まってから息を吐いて、肩を降ろした。

「それから、あんたー!」

ユゴが王の方を向き直る。

「アタシはあんたに『召し上げられた』覚えはありません!」

王もしゃっくりをしたみたいな顔になって、止まった。

「手を・離して・下さい!」

小娘に気圧されて、王は指を開いた。細い手首に白く痕が付いている。

即座にカワセミの所に駆けて来ると思いきや、ユコは動かなかった。

「……ユコ？ 帰るぞ、来い」

しかしユコは動かない。はまだ色の瞳をまっすく王に向けている。

「ユコ？」

「ねえ、あんた」

小娘は王を見上げた。

「何で、アタシを、騙したの？」

一直線の刺すような瞳が、激しく王を睨んだ。

王は、そのはまだ色に見据えられて、自分でもびっくりするほどタジタジとなった。

「……すまない……」

思わず子供の頃以来の謝りの言葉を口にして、正直な言葉がスリと出た。

「お前が欲しかった。テムジンのように……」

その言葉は……マズイ!! 一瞬ユコの眼の奥に光が横切ったのを、カワセミは見逃さなかった。

「帰るぞ!! ユコ!!」

焦って口を挟んだが、嫌な予感的中した。ユコはゆっくり水色の妖精を振り向いた。

「アタシ……ここに居る」

カワセミは顔色を変えた。

「バカを……! 言ってんじゃないっ!!」

「だって、このヒト、アタシが欲しいって……。アタシを必要としているのよ。アタシ……望んでくれるヒトの所に……居たい……」

ユコは何かが壊れて流れ出したような声で訴える。

(お前でなくともいいんだ! 蒼の妖精なら誰でも……!)

喉まで出掛かったが、暗闇に蜘蛛の糸を掴んだような表情の娘には言えなかった。そんな事が分からないような愚かな娘ではない。僅かに出来た居場所にすがっているんだ……。

「それで、おめおめ引き下がったのか!!」

ノスリの声が裏返った。執務室の机を叩いて立ち上がる。

「……カづくで連れ戻す……」

ツバクロが口の中で呟いて、外へ飛び出しかけた。

「待って……」

カワセミがその肘を掴んで止める。

「ユコが決めたんだ。無理矢理連れ戻したら、もっと悪い方向に行く」

「これ以上悪い方向があるか!! あの王は身中に災厄を抱えている、そう言ったのは君だろ?! それにはっきり言って、あの

王はテムジンとは違う!!」

「そうだ。あの手の輩が考える事は一つだ。グズグズしてたら、

「ユゴがてごめにされちまう!」

ノスリのそのまんま一言に、ツバクロは血色を失って卒倒しそうになった。

カワセミは息を吐きながら言った。

「…そこん所は釘を刺して来た」

ちよっと話をする…と、ユゴを遠避け、カワセミはフビライの胸ぐらを引っ張って顔を近付けて囁いた。

「あの娘の母親は、トルイの実母だ。解るか?」

「えっ?」

「つまり、あなたとは非っ常に近い血縁だ。『何か』やったら、畜生道に墜ちるぞ!!」

「そ…そのや、また…」

ノスリは額に手を当てた。

「確かに、言っちゃえば、そうなんだが…」

「自分が神の子だ、なんて言っている人間に、そんな後付けの道徳が通用するか?」

ツバクロはちよっと落ち着いたが、まだ心配は拭えない。

「うん…その後ひとつ、カマをかけてみた」

「…カマ?」

カワセミはフビライに更に顔を近付けて小声で言った。

「あの娘はあなたのお望みとは違う。即ち『妖精の力を持った自分の子供』はつくれない。どうだ? あの娘を突き放してくれたら、もっと妖艶でグラマラスな妖精の娘を紹介するが?」

「うわあ……」

ノスリはあんぐり口を開けた。

「トンでもないハッタリだな。大長が聞いたら、卒倒するぞ」

「紹介するだけだ。その後の事まで保障はしない」

「……………」

「それで?」

フビライは大真面目に、聞いてきた。

「他の妖精の娘も、あんなに可憐なのか?」

「…は?…?…?」

「だから妖精の娘って、みんなあの娘みたいに可憐で可愛いのか? そうじゃなかったら俺はあの娘が良い」

「……………」

「……………」

「……………」

「ボクは、ユコはそれなりに可愛いと思っている。だけど、他人がそう言うの、初めて聞いた…」

そう、ユコの母親は目の覚めるような麗人なのだが、残念ながら部品は貰っても配置が違うのがユコの外見だった。両親の見目の良い所は、みんなナナに集中してしまっていた。

第一、里八来て以来連日騒動を巻き起こすお転婆娘を『可憐』だなんて言う口は、里には存在しなかった。

『世継ぎは事足りている。配下には『百眼の鬪将』に『碧眼の獅子』がいる。今更特別な子供はいなくてもいい。ただ、側に控えて居てくれれば良い。それでは駄目か…?』

カワセミの前で王は目を伏せて、罰悪そうに呟いた。

言葉にしながら気持ちの飾りが削ぎ落とされ、シンプルな欲望だけが残った。要するに…、ただ単に…、ユコが気に入っただけなんだ、この王サマは…。

「…何で、あの娘を可憐だと思っ?」

「初対面の俺の馬の為に涙をこぼしてくれた。俺は…そんな存在に、逢った事がない…」

ノスリもツバクロも黙り込んだ。カワセミは続ける。

「ユコが彼処に残る事…、ユコの為だけじゃなくて。もしかしたら何か…、もっと大きな何かを、変える事が出来るんじゃない? そんな気がしたんだ」

カワセミですら、そんなに意識せず言った言葉、『ユコの生まれてきた価値』。有るのかもしれない。誰も気付かなかった、まったく思いも寄りぬ処に……。

く ナナ く

「僕はそれでいいと思います。カワセミ長の考えに賛成です」朝、事情を聞いたナナは、顔色も変えずにあっさりと言った。

「妹が心配じゃないのか?」

ノスリに突っ込まれたが、

「皆さん、忘れているようだけれど、ユコは僕と同年なんですよ。外見が子供なだけで。自分の身は自分で守れます。母がそうだったように」

流れるように言い切って、ノスリも、そして父親のツバクロも、一本取られた顔になった。

「で、カワセミ長は?」

ナナは長い髪を肩から滑らせながら、大机の奥の書類に手を伸ばした。

「そんなんで、また王都。それでナナ…」

「はい、カワセミ長の仕事は僕がやります。昨日割り振った時からそのつもりでしたから」

手に取った書類はそれで、ナナはもう段取りを頭に入れていく最中だった。

「すまんな」

書類を確認し終え、上着を羽織って、ナナはツバクロと共に外に出た。

ツバクロは、これから、西方の砂漠の国へ旅立つのだ。フシグが王朝を開いた事で人外界も影響を受けている。古い部族間で混乱が続いていて、大長が滞在して世話を焼いている。そこへ手助けに行くのだ。

二人、互々に肩を並べて馬繫ぎ場まで歩く。普段忙しい父親とのプレミア級のツーショットに、沿道の娘達がさざめいた。

「父上、近々母様の所へ行く用事がありますか？ もしあったら、同道させて下さい」

「ああ、そつだな。ユコの事も知らせておいた方が良さだろうし。西の出口から戻ったら行こうか。しかしどうした？ 珍し

いな」

「ええ……ちょっと…」

「……？」

馬繫ぎ場にはツバクロの夏草色の馬と、鬪牙の馬が繋がれていた。いや、違う…、そっくりだが、大長の鬪牙の馬より気持ち体高が低い。これはナナの馬の成長した姿だ。

ナナは名前を貰うより一足先に、成人の馬の鈴を与えられていた。本当は成人の証の名前と同時に拝領する物なのだが、身体が大きくなったナナには子供の馬では無理があった。数年前に前倒しで成人の馬の鈴を貰ったのだが、短い期間でナナの馬はメキメキと立派になった。

草の馬は主の資質に合わせて成長する。ナナは長となる資質充分…という事だろう。まあ、血統からいっただら当然と、周囲は普通に納得していた。

「もう少ししたら、僕の道案内無くとも高空飛行が出来るようになるね」

ツバクロは惚れ惚れする息子の馬を眺めながら言った。

「まだまだ怖いです。シエット気流ってトンでもなく速いんだもの」

「慣れれば簡単なんだけれどね」

ツバクロは自分の馬の馬装を手早く点検し、鎧を降ろして跨がった。普通でない飛行をする彼は、馬装を自りチエックするのは欠かさない。

「ナナならすべ出来るようになるさ」

急上昇して一瞬で青空の点になり、彗星のように飛び去る父に見惚れてから、ナナは自分の馬に視線を移した。

馬は切れ長の気高い目でナナを見つめ返す。子供の頃はクリクリと懐こい目をしていたのに、全然違う馬になってしまった。自分に合わせて成長しているんだから、自分に合っている筈なのに、全然合っている気がしない。

「行こうか…」

そおとと跨がると、力溢れた馬はグンツと急上昇しようとした。

「待って待って!! お前は真似しなくていいの!!」

手綱を引いて必死で馬を抑えぬ。

「ふひ…」

やっと最近、安定して飛べるようになった。この馬は力があつ過ぎる。ユコなら大喜びなんだろうが…。

「父上も…みんなも、どうして僕が何でも軽々とこなしていると思えるんだろう…」

ナナは溜め息を付いた。

カワセミ長のやる仕事なんて、自分に出来るかどうかギリギリなモノばかりなのに、期待されるもんで、つい平気な素振りをしてしまう。本当はいつも結構一杯一杯なんだ…。

唯一自分を解ってくれている叔父…大長は、西の眷族の所に詰めていて、長らく里に居ない。みんな、ナナには期待を通り越して、出来て当然、放っておいても大丈夫、すぐに出来るようになる、という空気だった。

「本当に、長の血の資質を色濃く受け継いでいるのは…」

ナナは妹の幼い顔を思い浮かべた。

里へ来たその翌日に、彼女は、夢の国に居るカワセミ長と通じる、という難事を、ナチュラルにやってのけた。ナナが一生懸命基本の勉強をこなしている間に、軽々と長の一人の弟子に収まってしまった。

「生まれながらに何かを持っているとしたら、それは、ユコだ」あの妹より先に名前を貰う訳に行かない…という気持ちで漠然とあった。

嫉妬とか焦りとかを持った時期もちょっとあった。今はそういうのを通り過ぎている。自分は自分…、出来る事しか出来ないんだから。

そういう境地になれたのは、育ての親、ノスリ長のお蔭だ。自分の能力を把握し、居場所を確立させて、やるべき事をきっちりこなす。

ナナは、三人の長の中でノスリを最も尊敬していた。彼のようになりたいと、目標にしているのだが、周囲は…当のノスリですら、ナナにはもっと高い立ち位置を求めている。

「ユコ…早く一人前になってよ…」

すっ飛んで行きそうな馬を何とか抑えながら、空の上もあって少し大きな声で独り「コチた。

「僕、意外と平凡なんだ……」

ユコがいなくなっても、カワセミは一見あまり変わらなかつた。ただ、長年側にいる仲間には、彼の心が此処に無く、精彩を欠いているのが見て取れた。

で、微妙にナナに負担が行く事になる。

その日もナナは、外で一仕事終えて、帰路、人間の街の王都の上を通り掛かった。

「あそこにユコが居るのか…」

宮殿は前王モンテの時代からの物だが、門構えや庭園は新たに設えられ、明るくきらびやかだ。

「なんだか、あいつ、お気楽な星の下にいるよな」

庭園の一角にユコの馬が遊んでいるのが見えた。ナナは何となくそこに降りてみた。ナナだけでなく、好き好んで人間の陣地に近寄る妖精は、あまりいない。

「…妖精が見えるのは王だけだし、大丈夫だよね…」

ナナはキョロキョロしながらユコの馬に近寄った。

「又し振りだね」

まだあでもない仔馬の顔の馬が、ちょっぴり羨ましかった。

庭園の一角にはユコの馬の好物の赤爪草がこれでもかとはかりに積み上げられ、ピカピカした真鍮の水桶が置かれていた。草の馬が見えない待従は、訳の分からないまま草を刈り、朝

夕新鮮な水を入れ替えさせられているんだろう。

馬のタテガミには金糸のリボンが編み込まれ、額飾りは細かいトルコ石と錦の絹糸で飾られていた。

「凄いな…」

「スゴいよね」

ナナは横っ飛びした。忘れてた!! このヒトがいたか!!

「蒼の里ではナニ考えてんの?」

淡栗毛のそのヒトは、ユコの馬の鼻面を撫でながら、ナナに向き直って笑った。

「ナナ……だよね? 大長殿かと思った」

「ひ、久し振りです、シリギ殿……」

「シリギでいいよ。蒼の里では僕の階級なんて無関係だろ」

ナナがシリギに会うのは、彼が瀕死で里に運び込まれた子供の頃以来だ。お互いもうすっかり大人に変わったのに、お互い一目で分かった。

「里で寝込んでいた時、君も着病してくれたよね」

あの頃とあまり変わらない、母やユユと同じはまだ色の瞳で、懐っこく見つめて来る。ナナは意味もなくドギマギした。

「……えと、シリギ…は、何でここに？ 住んでいるのは昔の都の方でしょ？」

「ああ、王に呼び出し食った。しょーもない事で」

「はあ…」

「新しい馬が欲しいんだと。僕の葦毛を寄越させてよ」

「……………」

王って、人間のワガママの権化なのか？

「そんで言うてやった。戦場でいっちゃん目立つから、面倒くさいっすよ！ っつて」

ナナは吹き出し、シリギも顔をしかめて笑った。

「本当はそんなしょーもない呼び出しだけじゃ、わざわざこんなクソ宮殿くんたりまで来てやんないんだだけだね」

大ハーン相手に凄い言い草だ。

「カワセミに言われているからね。機会ある毎にユユを気にかけてやってくれって」

ナナは笑顔が少し消えた。また、ユユか……。

そんなナナに気付いてか気付かないのか、シリギは飄々と続けた。

「玉座の横にちんまり座ってて、他の者には見えないのに、王がメチャメチャ飾り立ててんの。あれじゃ、刺繍と宝石のお化けだぜ。完全に自己満足の世界だね。王も僕もお互い見えてる事は知ってて知らない振りだから、ユユもかしこまっていたけれど、帰り際、肩をすぼめて溜め息付いて見せた。どうも、母君とテムジンみたいな戦場活劇を夢見ていたけれど、思っていたのと違った……って感じで、非常に退屈気だったよ」

聞いているうちに、ナナはまた苦笑しだして、シリギも微笑んだ。

「葦毛は口実。本当はユユを僕に見せびらかしたかったのさ」
シリギは微笑み続けたまま言ったが、ナナはまた真顔になった。

「ああ、ごめん…、勿論ユユは物じゃない。そういうカンカクの間人もある……って事さ。特にフビライはね。僕の親父もそうだったけれど、テムジンにすんごいコンプレックスがあるんだ。

で、『どうだ、凄いだろ、俺はテムジンと同じように蒼の妖精を待たせたくてさー』って」

ナナは目を丸くしたが、可笑しさが込み上げてきて声を上げて笑った。

「じゃ、じゃあ、貴方も僕を従えて練り歩いてみますか？ 王の前をー」

今度はシリギが目を丸くした。

「あっはははは!! そいつぁいいや!! ヌユよりは君の方が何百倍も見栄えが良い!! あのヒト、すんごい顔するぞ!!」

すんごい失礼な事を口走っているのだが、このヒトが言っているとナナは全然不快にならなかった。

「本当に行きますか?」

「いや、やめとこう 洒落になんなくなる」

笑い過ぎて涙を浮かべながら、シリギはユユの馬から手を離れた。

「あのヒトはねえ…、昔からヒトのモノとなるか、欲しくってたまらなくなるのか」

「……………」

ナナはそびえる城壁を見上げて、聞いた。

「玉座も、ですか?」

「フレグみたいに南の王で収まってくれば良かったの

に。お陰でこっちは偉い苦労だ」

シリギはもう笑っていないかった。

もう何年も、カワセミがシリギの所へ通い詰めて、何やら画策しているのは知っている。残る二人の長が、大体の事は把握しつつも、カワセミに任せて手出ししない事も。

考えてみたら、自分よりもずっと迫力ある気難しい有翼の妖精と、このヒトは本当につるんでいるんだ。王のやっている事がお子様ランチに見えもするだろう。

ナナはこの淡栗毛の…自分と血縁のある人間の男性を、もう一度見つめ直した。

「そういえばさ…」

シリギは思い出したように口を開いた。

「前から気になっていたんだ。君と、ユユって……」

「……………」

「本当に、立派になって…。見違えてしまったわ」

「母様こそ、変わりなく、お綺麗です」

「まあ、そんなお世辞まで言えるようになって…」

「僕の子供だからねー」

西方より戻ったツバクロは、ナナと共に一日暇を賣い、風出流山(かぜいするやま)の神殿へ来ていた。

蒼の狼は久しぶりの息子の来訪に喜んで、四枚の羽根を翻して入り口の階段を駆け下りて来た。

まずはツバクロが、ユコの事を報告した。蒼の狼はちょっと眉根を寄せたが、

「カワセミ殿が認めたのなら、それで良いのでしょうか」

と、溜め息を付いた。

「ユコは、私とテムジンのお伽噺にちょっと憧れたのかもしれないね…」

「それはフヒライ王の方です」

ナナが口を挟んだ。

「王が、テムジンに憧れているんだって、シリギが言っていました」

「まあ…」

狼は首を傾けて、ちょっと微笑んだ。

「シリギ…あの子は元氣？ 先の戦では難儀したと聞いたけれど…」

「あの子…って、もう立派な大人だよ」

今度はツバクロが口を挟んだ。

「一旦開いた災厄の歪みを、見事に閉じて退けた。妖精の助けを借りず。本当に大した奴だ」

ナナは真顔になって父親を見た。自分には知らされなかった

事だ。ツバクロはそれに気付いて、その話は打ち切った。

「さて、僕は神殿の立て付けの点検でもして来るか」

取って付けたように立ち上がる。

「た、立て付けっ？」

真面目に捉えて戸惑う狼の横で、ツバクロはナナに目配せして扉から出て行った。狼とナナが残った。

「…っ…」

狼は不思議そうにナナを見る。

「母様…」

ナナは母に正面向いた。

神殿の中をグルッと散歩して、ツバクロは玄関に戻った。散歩といっても神殿の大部分は分厚い氷に閉ざされている。廊下の奥にあるというレリーフの広間なんて、鉄の拳を持つ一つ目巨人にだって入り込めない氷漬けだ。

入り口の広過ぎる玄関の空間を仕切って、狼と子供達は暑らしていたのだ。

何かが壊れる大きな音がして、ツバクロは部屋に駆け込んだ。狼が盆ごと茶器を引っくり返してしまっていた。その手も表情も小刻みに震えている。

「どうした?! ナナ、聞きたい事って何だったんだっ？」

ナナは、そんな大それた事は聞いていないのに…？ という顔で、戸惑いながら答えた。

「羽根……羽根って、あげたり貰ったり出来るんですか…？」

「…」

「だ！ 誰に！ それを、聞いた?!」

ツバクロは上ずった。禁忌中の禁忌だ。狼も口を手を当てて硬直している。

「誰って…自分でそう思っただけです。…え？ じゃあ出来るんですか？」

「ナナ…!」

ツバクロが制止する前に、ナナは次の言葉を発した。

「出来るのなら、母様の二つある羽根の、ひとつをくださいませんか？」

「ナナ!!」

思わず手を上げた。その手を狼が抑えた。

「ナナ、理由を言っただけ頂戴。ただ欲しいからではないでしょっ?」

ツバクロも手を降ろして息子を覗き込んだ。両親の慌てよう

におのいたナナは、ぼそぼそと小さく口を開いた。

「ユウが、羽根を持ったら…って…」

「…?」

狼とツバクロは顔を見合わせた。

「カワセミ長は羽根のお陰で眠りの世界から帰って来られた。

ユウも羽根を持てば今の状態から抜け出して、成長し始めるんじゃないかって、思ったんです」

「……………」

二人、胸を撫で下ろした。何か悪しき者がナナを誘惑した訳ではなかったようだ。たまたま偶然考え付いたんだろう。

「ナナ、成長って、羽根に助けられてする物じゃない。それに、羽根は、羽根を持つ資質ある者にしか持てない。ユウが持てるかどうかは分からないよ」

ツバクロは話の核をすらすらしてこの話題を終わらせようとした。

「でも…ユウは母様の子供だし、持てると思っていました」

ナナはまだ納得行かないようだ。

「ワタシだってあげられる物ならあげたい」

蒼の狼がぼつりと言った。

「でもね、羽根は本当はあってはならないモノなの」

「あってはならないっ」

ナナは顔を上げた。

「僕はそうは思いません。羽根の謂いわれは知らないけれど、

小さい頃から母様の羽根が大好きだったもの。母様は知らない

かもしれないけれど、添い寝してくれる時とか、羽根が勝手に

動いて僕らを包んでくれるんです」

狼とツバクロは顔を見合わせた。

「凄く暖かで安心出来た。僕もユゴも、大好きでした。今も好きです。あつてはならないモノ…なんて、言わないで下さい」

狼は目を丸くして立ち尽くした。

ツバクロは改めて愛しい妻の四枚の羽根を見つめた。大きな白い羽根、小さな銀の羽根…。羽根に心があるかは解らないが、今まで忘れていたのを謝りたい気分になった。羽根は、ただ、護りたいだけなんだ……。

帰り際、ナナは思い出したように振り返り向いた。

「あ、そう、もう一つ聞きたい事があったんです」

「もう母親を驚かささないでくれよ」

ツバクロがちよっと身構えた。

「今度のは、そんなんじゃないです。えーと……母様は、どうして僕達を双子に生んだんですか？」

「……」

狼はキョトンとした。

「どうして双子に……って言われても……」

「双子にしようと思って出来る訳ないだろう」

ツバクロも呆れたように言った。

「何だって、そんなおかしい疑問、浮かんだったんだ？」

「ああ、そうですよね。僕も変だと思っただんです。聞かれたんですよ」

「誰」

「シリギに……」

ナナがとうとうやらかした。

元々ギリギリラインの上で、強がって綱渡りの仕事をしてきたのだ。いつか踏み外す。

棘の森の沼の又シ殿に機嫌伺いに行ったのが、又シ殿に侮られて沼に引き込まれた。寸での所で逃れたが、沼の瘴気に侵され動けなくなると、SOSの光を打ち上げ、ノスリ長に救助される羽目になった。

「ナナには色々まだ早過ぎたのかもしれない……」

ノスリは自ら反省するための一言だったんだが、ナナにはズンと堪えた。すぶ濡れで塞ぎ込むナナに上衣を被せて、ノスリは困った顔で覗き込んだ。

「なあ、お前さん、子供の頃から子供らしくなかった。子供らしいってのは大人に甘える事だ。自分をさらけて助けて貰う事だ。子供としての成長過程を経ないと立派な大人に成れんぞ」
ノスリ長にしては珍しく、理屈っぽい説教をされた。

一杯一杯の上に、溺れて水を呑んで、説教食らって、辛抱強

いナナも、とうとう大声を上げた。

「だって、ユゴはいつまでも一人前にならないし、カワセミ長は仕事放ったらかしだし、僕が無理してでも頑張りなくちゃイケなかったんでしょ!!」

思えばこの子は反抗期すら無かった。

更に叱られるかと思ったら、ノスリのゴツイ腕にガッツリ頭を抱えられた。

「うんうん、そうだ。俺達が悪かった。お前をこんな目に遭わせてなァ……。だから、もっと、そんな風に甘えてくれ。文句も言っていないだぞ。命を落とすよりははずっといい……」

分厚いあったかい手に背中をバンバン叩かれて、ナナはコホコホむせて、涙が出て来た。

「百眼の鬪将は南の大国を完全に制覇したらしいよ」

カワセミが木の上から最後の蜜柑を放る。

「ふうん……」

下でシリギが最後の蜜柑をキャッチした。

「本当に木守りの実を残しとかななくても良かったのかい?」

ソルカ妃の庭園。

ここの木々も大分、歳を取った。年々収穫出来る量が減って、今は痩せた実が少し採れる程度だ。僅かな蜜柑を袋に詰めなが

らシリギは言った。

「いいよ。多分この庭で蜜柑を摘むのも、今年で最期だ……」

「……………」

カワセミは黙って袋を受け取り、自分の馬にくくり付けた。ソルカ妃が亡くなってから、ユゴが毎年蜜柑の蜂蜜漬けをしらえていたのだが、今はそのユゴもいない。ノスリ家の娘達の作る蜂蜜漬けは、やっぱりちょっと味が落ちた。

「フビライ王から召集が掛かった」

シリギは蜜柑の老木を見上げながら呟いた。カワセミは黙ったまま、シリギを見る。

「草原のまん真ん中の戦争だ。行動を起こす舞台には申し分ない。根回しは済んでいる」

「……………」

カワセミはやはり黙って口を結んでいる。

「大ハーンが腰を抜かして、嫌でもバヤンを呼び戻さなきゃならないような事態にしてやるさ。大丈夫、今回も災厄の歪みは塞いで見せる。そんな顔しないで……」

蒼の一族はここ何年か、小さな災厄の地割れを見つけては修めて来た。半世紀前に大きな歪みを押さえて以来、出現頻度が増えている。それ以前はまったく確認されていなかったのに。

東方の古い種族に今一度聞いてみたが、彼等にも解らなかった。あの歪みを止めた者などいなかったのだ。

そして、歪みはどうとう……ひとりの人間の身の中に出現した。蒼の妖精の手出し出来ない処に…。

シリギはカワセミに目を向けた。薄青の…冬空のはなだ色の瞳。

「歪みは…災厄は…もしかしたら、どうしても必然なモノなのかもしれない。蒼の一族も薄々そう感じているんだろう？ でも、僕は抗う。人間だから」

カワセミは目を伏せた。

「妖精は…人間に、手出し、出来ない……」

「そう、だから僕が生まれたんじゃないか。人間の内に現れた災厄を返けるのは人間にしか出来ない。カワセミ、もしかして僕を憐れに思っている？ ……まさかね!!」

俯うつむいてしまったカワセミに、シリギは覗き込んで笑顔を向けた。

「生まれた意味を知らなかった頃の僕の方が、ずっと憐れだったよ。カワセミは何年も一緒になって、僕の進むべき道を模索してくれただじゃないか。感謝しているよ、本当に」

水色の妖精は顔を上げた。

「せめて、封印を解かせてくれ。君が、君の身を守るように」

「何回も言っている。答えは同じ。人間相手に妖精の力は要らない」

詭弁だ…。シリギは戦場で散々、風を便利に使っている。

妖精の力は人間の命を削る。彼は自分に重いモノを背負わせたくないだけだ。

必要だから持って生まれた力…、それさえ使えれば戦場で、何回も何回も、命を危険に晒す目に遭わずに済んだ筈なのに…。歯がゆさに唇を噛むカワセミに気付かない振りをして、シリギは飄々と続けた。

「ユコの事が心配だ。余計に気を回して暴走しなきゃいいが」

「ヒトの心配をしている余裕があるか？ 百眼の闘将が相手だぞ。ユコの所へはボクが行くから…」

「ああ、後、…ナナにも気を配っていてくれ」

「ナナに？」

「具体的な事は分からないけれど…、ナナも、流れの真ん中に居る…」

「……………」

シリギがトルイから受け継いだ能力…、蒼の狼から永々と流れる長の血から受け継いだモノ。

『物事の真実を知り、流れを見据える力』

彼はずっと、何年も…、大きな流れを見据えて、災厄の歪み

と鬨って来たのだ。

棘の森から帰る道々、ノスリはナナに、カワセミがなんでシリギの所に入り浸っているか、教えてくれた。

「あいつも、あんまり甘える機会がなくて大きくなった。大人コドモだ。いつも一直線。トルイの危険を予知出来なかった事を、いまだに引きずっている。だから、シリギが心配で心配でしようがないんだ…」

ナナはノスリの暖かい背中を感じながら、それを聞いた。ずぶ濡れのナナが冷えぬよう、ノスリは二人乗りで前で風避けしてくれているのだ。

「ねえ、ノスリ長…」

「なんだ？ 冷えたか？」

「ううん、…ね、僕達、本当に、何も出来ないのでしょうか？」

「ん…？」

「ユウが王に関わっている。なら、双子の片割れの僕にも、何か役割がある気がするんです…」

「……………」

） 後編へ ）

二〇〇九・二・二七

